・橋梁新聞（平成 27 年 12 月 11 日号　第 2 面）

リレー橋友録　- 私の橋歴書 -　「若手と呼ばれ 20 年」

企画管理室
技術開発グループリーダー　松村寿男

リレー橋友録　私の橋歴書　〈877〉

若手と呼ばれ20年

瀧上工業株式会社
企画管理室
技術開発グループリーダー　松村　寿男

橋梁業界で育ち20年目になります。鋼橋に携わるきっかけは、大学院博士前期課程（修士）在学中に起きた兵庫県南部地震です。名古屋で就寝中突然大きく揺れ、その日研究室に行ったらすでに第一陣が現地に出発。私は一週間後に。電車がたどり着ける駅から何キロも歩いて、皆と見た光景は「大変なことが起きた」。震災で見た記憶と研究の接点がよく分からなかった当時、実験で結果が目に見えてわかる同級生を横目に見つつ、なかなか結果の出ない「繰り返し荷重を受ける鋼製橋脚の弾塑性有限変形」について解析プログラムを動かす毎日は、学生ながらしんどい時間でした。震災で見た座屈形状を再現した実験を3D解析で表現できたときは、修士論文締め切り2週間前。その後改定された道路橋示方書の参考文献に「研究時の論文が掲載されたぞ」と知らせを受け、耐震設計の重要な研究に携わっていたと分かったのは、瀧上工業に就職してから随分後のことでした。

入社2年時には、今から考えると恐ろしくなるのですが、「鋼上部工って何？」の分際で出向し、長支間場所打ちPC床版を有する鋼2主桁橋の設計JVに携わりました。当時、茶髪の風貌（今でも？）だったせいか、社内外で「こんな若者（茶髪）で大丈夫か？」と言われました。道路橋示方書を「逸脱する」ということで、三次元FEMで床版を設計して実際の橋を模擬した実物大試験などの性能評価に皆で夢中になりました。当時出会った技術者は、現在リレー橋友録に登場している有名かつ愉快な仲間達でした。人脈に恵まれ、仕事のやりがいを学んだ気がします。これをきっかけに土木学会の道路橋床版の調査研究小委員会に誘われ、社外活動で人脈が広がりました。JV出向から帰り、修士でご指導を受けた先生の計らいで社会人博士コースに週末通いました。

一方、実務ではメーカーの設計主担当として、ものづくりの製作現場、工事現場との連携で橋を完成させる大変さと達成感を繰り返す日々が続きました。年数はかかりましたが、博士（工学）を鋼コンクリート複合柱の非線形有限変位解析で取得。その後、桁と柱の剛結構造の設計や、複合柱のマスコンの温度応力解析と施工現場での実証計測など、鋼橋メーカーでありながらコンクリートも当たり前に扱う時代に、社内でも存在感を示すことができました。技術士や診断士の資格取得後、仕事の面白さを実感している時期に日本橋梁建設協会の「奨励賞」を頂き、床版小委員会のメンバーに加えて頂くことになりました。今年から床版技術部会の副部会長になりました。ところが、この時期に突如、建設後50年を迎える鋼トラス橋や鋼吊り橋が次々に腐食と疲労による損傷を受け、「専門家として何とかしろ」と現地に行きました。行くたびに「待ったなし」の状態で、会社の皆で力を合わせ対応しました。「保全の時代」になっていたのです。発注者と我々（世間では専門家？）との橋の維持管理に関する感覚の差も学びました。「橋を直す」ばかりが答えではなかったのです。自身を反省しました。それからは、相手の想いを聞き、技術的に（橋にとって）よりよい答えになるよう対話を心がけることになりました。現在、地元名古屋では東海構造研究グループ（SGST）の幹事長に任命され、若手・ベテランの仲間たちと一緒に勉強をしております。新たに2つの委員会を立ち上げ、情報を発信していく所存です。

次回は尊敬する名大時代の先輩、エム・エムブリッジの鈴木俊光さんにバトンタッチします。